

ろんだん 佐賀



朝長 修さん

ともながクリニック院長

ともなが・おさむ 1960年生まれ。嬉野市(旧嬉野町)出身。鹿島高一長崎大医学部卒。1987年に東京女子医科大糖尿病センターに入局、専門医として特に糖尿病性腎症、腎不全の治療に従事する。2006年、ともながクリニック糖尿病生活習慣病センター(新宿区)を開設。東京女子医科大糖尿病センター非常勤講師。東京都。

私の「ろんだん佐賀」は今回で終了です。お付き合い頂き、ありがとうございました。最後の話題は自分がかような医療人になりたいかというものです。

人様の役に立ちたい、患者さんに感謝されるような医療行為をやりたいたいことが大前提ですが、人それぞれ価値観や思想はさまざまです。誠意を持って対応したつもりが、患者さんの気持ち悪くしてしまったこともあります。まず自分が患者さんの立場だったらどうしてほしいかと考えます。

また、目の前の患者さんは自分の家族や友達と思って接しています。医療者もミスをしたくないことにはあり得ないので、自分の間違いに気づいたら、迅速に非を認めて全力で事後処理に当たります。細かいことを気にされる人、ものごとをネガティブに考えがちな人に対しては、自分の妹や母親がそんなことを言ってきた

患者さんに寄り添う

ら、こんな風に答えるだろうという基準で応対していません。

結果的には軽薄で楽天的な受け答えになっている可能性もあり、この部分は自分の欠点なのかもしれません。また、クリニックの受付、看護師、栄養士、検査技師の全員が、患者さんに気持ちよく通院して頂ける

どもの頃から目にした父親の診察風景は、私にとつて最良のお手本でした。

最近、ショックな出来事がありました。義弟が潰瘍性大腸炎の再発で島原市の病院に入院しました。重症化し、諫早市の基幹病院へ転院、ここでも手に負えず、最終的には長崎大病院で血球成分除去という高度医

んでした。私が院長先生に電話し、文書でも再提出をお願いしましたが、返事はありませんでした。消化器内科医である私の弟が長崎県の担当者に談判してくれ、再診査、認定を受けることができました。

私は人工透析公費負担の診断書、脾や腎移植待機の診断書が通らなかつたら、

か理解に苦しみ、情けない気持ちでした。この出来事で、患者さんに寄り添う気持ちが大変だと再認識しました。医療者としての道を歩み始めた私の子どもたちや、甥っ子、姪っ子、みんなに理解してほしいことです。

外科医であり私の最も重要な友人が11月、脾臓のた

恩師や父の診察をお手本に

ような雰囲気を作ることにも心がけています。

私が最初に教育を受けた東京女子医大の平田幸正先生はよく、「病気を診るんじゃない、病気を持った患者さんの人間そのものを診なさい」とお話になりました。田舎の開業医である私の父は、ごく自然に平田先生と同じルールで患者さんを診ていたと思います。子

療を受け、社会復帰しました。

特定疾患治療費の公費助成を受けるには、県の認可が必要です。ところが諫早の病院から提出された診断書は記載不十分で認定されず、高額な医療費の負担が発生します。困り果てた義弟夫婦は、診断書の訂正、再提出を主治医に嘆願しましたが、応対してくれませ

直ちに担当者に電話します。事情を説明して、一日でも早く書類の審査が通るように徹底してきました。

文書の訂正や審査担当者に連絡するのは医師本来の仕事ではないのかもしれないが、困っている患者さんに手を差し伸べなかつた医師は失格です。

め亡くなりました。中学とともに寮生活を送り、浪人、大学も7年間一緒でした。まだ61歳、医師としては道

半ば、無念だったはず。緩和ケアも専門であり、自分も死の前日まで仕事に行つたそうです。何と立派な最期でしょうか。私は骨を拾いながら、医療者として友人の分まで頑張ると心に誓いました。